

第十三話

純友逐電事

『前太平記』上 卷第二 四十三頁から四十六頁より

[淑人純友を攻む]

四月二十一日、夜のまだ明けていない時に、伊予守紀淑人は千六百騎余りの軍勢を引き連れて、三津の浜を出発しようとしなされたところに、旗を一本かざさせてその軍勢は二百騎ほどが、静かに馬を叩かせて現れた。ああ、敵だと思ったところ、敵ではなくて伊予国の目代橘遠保であった。淑人はたいそう喜んで馬をおさえて仰ったことは、「勅命に従い当国に参り下っておりますところに、当方の者ども

当手の者共、

の中には、この国の道を知っている者がおりませんので、どうしようかと心もとな

国の案内知りたる者無く候ゆへ、

如何と不審しく存じ候に、

く存じますところに、速やかなご登場、喜びは格別です。さて、合戦の作戦はどの

早速の参着、

喜悦斜めならず候。

ようにするのがよろしいでしょうか」と意見をお問いただしになったところ、遠保は鞍壺でかしこまって申し上げられたことは、「先々月の二月、伊予国の別宮で勝負を決する折、味方の勝利の見込みがなかったので、しばらく山林に身を隠し、国

味方の利無かりし故、

司（淑人）のご下向を待っていました。とりわけ、昨夜はこっそり密偵を入れ、敵

就中、 昨夜潜かに忍を入れ、

の城中を覗き見させると、将たちは慢心し、軍中に乱れがあると分かっています。

将の心驕って 軍に懈り有り

そこで前方から御軍勢（淑人の軍勢）をお向けしますならば、遠保の部下の軍勢

則ち大手より御勢を向けられ候はゞ、 遠保が手勢は、

は、城中の事情をよく知っている者たちでおりますので、背後から周り、たった一

城中の案内能く存知たる者共にて候へば、 搦手より廻り、

揉みで攻め落とすこと、僅かな時間もかかるはずありません」と、道理に沿って申

唯一揉みに攻め落とさん事、 踵を回らすべからず候」

し上げられたところ、淑人はこの策を信じて従い、「本当にこの道理は当然の緒成り行きに思います。しかしながら、御軍勢（遠保の軍勢）だけでは、あまりに少な

さりながら 御勢ばかりにては、 余りに不足に候へば、

いですので、当方の軍勢の中から、少しお招き加えください」と仰って、熟達し

当手の勢の中、 少々召し加へられ候へ」

ている兵百二十騎を遠保（の軍勢）に加えられた。こうして前方後方合計千八百騎
余りが、純友の潜んでいる道前道後の境にある高縄城に押し寄せて、関をどっとあ
げさせた。城中では今敵が近づいていようとは思っても寄らなかったので、皆途方に
暮れ大勢の関の声も競うことなく、弓矢も取ることなく、こちらに十人、あちらに

鯨波をも合はせず、

二十人寄り添い合って、ひたすら逃げ落ちる準備の他に、さほどの虚勢もなかった

唯落ち支度の外 さしたる義勢も無かりけり。

のだった。

【純友敗走】

そこで、純友の腹心の者と頼りにしている伊賀寿太郎と、同じく次郎兄弟がこの
ありさまを見て、たいそう怒って申し上げたことは、「ええ、不甲斐ない者どもの

「えゝ云い甲斐無き者共が振舞いかな。

ふるまいだな。よくもまあ、このような臆病な心持で、このような重大な謀叛に関

能くも 斯様の臆病なる所存にて、 斯かる大儀の謀叛には与せしよな。

わったものだなあ。さあ、勢い盛んな一戦をしてみせよう」と言って、一つの城門

いで声花なる一軍して見すべし」とて、一の木戸を推し開き、

を押し開き、他を加えることもなく兄弟二人で、刃先を並べ切って出て、近づく敵

人まぜもせず兄弟二人、鋒を双べ切って出て、

を幸運なことに思い、縦割りに、母衣付を切り（首を斬り？）、胴を輪切りにし、

近づく敵を幸いに、立割・ 母衣付・ 車切、

左手に引き付け、右手に受け、走り倒しては首を取り兄弟の手にかかって、二十七

弓手に相付け、 馬手に受け、^(巻)

騎を切り伏せ三十二騎に負傷させ意識を奪っている様子は、実に立派に見えてし

実に目覚ましくぞ見へにける。

まった。攻め寄せる軍勢（淑人）は、これに追い立てられ、わざわざ近づく者もな

く、十方から矢霰を作って、ただ遠方を矢で射るだけだった。純友はこれを見て、

「おい、殺させるな、続け者ども」と指図して、その身は精好織の大口袴に黒糸緘

の鎧を着て、一丈余りある檜の木の枝を手に提げて持って、舎弟の前右衛門佐純

乗、四郎純正、七郎太夫純行、兄弟や主従三十七騎、どっと喚いて駆け出した。一

方の攻め寄せてくる軍勢は五百騎余り、互いに切り開いて戦った。純友はあんなに

もの小勢であるといっても、覚悟していることであるので、大勢の中へ破って入り、追い散らしては駆け抜け、七八度ほどもみ合った。攻め寄せる軍勢は、これに

寄せ手

是に

尻込みして、バラバラになって退去する。この間に、純友の郎党は十三騎殺され

辟易して、取次に成って引き退く。

た。そこで城の方を見上げたところ、早くも敵が入れ替わったと思われて、櫓や搔楯に火を付けている。純友が言ったことは、「もう手下は疲れて、その上小勢であるので、たとえ体と命を捨てて戦うとしても、そうまで遠い（非現実的な）計画で

仮令身命を棄てゝ戦ふとも、

さまで遠き謀に非ず。

はない。片方を倒して一先ずは命を永らえさせて、もう一度大軍を引き連れ、念願

一方を打ち破つて一まづ命生き延びて、

重ねて大軍を起こし、

を遂げるべきである」と言って、東の尾崎に待機して置いた三百騎余りの中に馬を

素懐を遂ぐべきなり」

駆けさせ入って、思うように戦って、その後は生き死にが分からないようになって

其後は死生を知らず成りにけり。

しまった（→行方知れずとなった）。

注釈

※壱・「立割・母衣付・車切、弓手に相付け、馬手に受け、」……少々不思議な表現。訳にもある通り、「立割」は「縦割り（頭から切ること）」、「車切」は「輪切り」ことで、両単語も身体攻撃を表している。しかし、「母衣」はのマントのような布で、矢を防ぐために用いたという。「母衣付」は『広辞苑』によると、「筋兜の四天の鋌の下にある穴から出してある紐の輪奈」のことであり、「俗説に母衣をつけるため」だという。そのため、この箇所がなかなか理解しきれず、訳中では「母衣付を切り裂き（首を斬り）」としたが、あまりにも不完全な訳である。身体攻撃の単語の間に挟まれて突然鎧の部品の名将が入り、なおかつ、それが並立して描写されていることが引かかる所である。もしも、このサイトを見ている人で、このことが分かる人がいたら、どういうこととして理解すればいいかを教えてほしい。

さて、本格的な戦の始まりです。今回は伊賀兄弟がカッコイイですね。二人が並んで打って出るシーンは映像として脳内で再生されています(笑)

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/6/5

改訂：2021/3

海熊童子